

年齢および性別：40歳代が6例と最も多く、次いで30歳，50歳代がそれぞれ4例などであり，性差はみられなかった。抜歯部位：上下顎別では下顎が13例で上顎の約2倍であった。歯群別では上下顎とも大白歯群が最も多く14例を占め，歯種別では下顎智歯が5例，上顎第1大白歯が4例，下顎第2乳白歯1例を含む下顎第2小臼歯が4例であった。主訴：自発痛が15例と大半を占め，ほかに開口障害3例などであった。初発症状：自発痛がのべ例数で16例，腫脹および開口障害がそれぞれ2例ずつであった。症状発現までの期間：全例が3日以内であった。抜歯時臨床症状：問診により軽度の炎症があったもの3例，なかったもの8例で不明は9例であった。初診時病状の評価：初診時病状を客観的にとらえるために，日本口腔外科学会抗生物質効果検討委員会で作製した病状の採点基準を用い採点し，総合得点で2～10点を軽症，11～20点を中等症，21～30点を重症と仮に分類した。この結果，軽症は12例，中等症，重症はそれぞれ4例ずつであった。臨床検査：血液一般検査は10例について行われ白血球増加症は2例にみられたほかは異常がなかった。尿検査は8例について行われ尿タンパク陽性が1例あった。細菌検査は6例に行われ4例に細菌が分離された。内訳はのべ例数で *Str. α*，*Str. γ*，*Neisseria* が3例ずつであった。本院で行われた治療：入院3例のほかはすべて外来通院に依った。内容は化学療法19例ですべてに抗生剤が投与され，その平均投与期間は6.4日であった。外科的療方は抜歯窩搔爬6例，膿瘍切開4例であった。

質問：小川 邦明（県立中央病院歯口外）

1. 抜歯窩に感染がおこったかどうか判定するのは極めて難しいと思われるが抜歯後感染症の定義について教えて下さい。
2. 組織隙への波及について検討してありましたら教えて下さい。

解答：島田 隆夫（口外Ⅱ）

- 1) 抜歯時に比べて臨床症状が急性化，増悪したものを，抜歯後感染症としてとらえた。
- 2) 重症例で翼突下顎隙，扁桃周囲の疎性結合織が関係していたと思われた。

追加解答：水野 明夫（口外Ⅱ）

- 1) 従来，明確に定義されているわけではないが，抜歯時に比べて，臨床症状が急性化，増悪したものを，抜歯後感染症としてとらえた。ドライソケットとは区別した。
- 2) 比較的重症例において，翼突下顎隙，顎下隙，咬

筋下隙，および犬歯窩の疎性結合織などが，炎症の拡延に関連していたものと思われた。

#### 演題5．口腔外科領域における凍結療法

—第3報 良性粘膜疾患について—

○班目 幸恵，小口 順正，山口 一成，  
千葉 清，大屋 高德，遠藤 隼人，  
工藤 啓吾，藤岡 幸雄

岩手医科大学歯学部口腔外科学第一講座

凍結療法は1) 外科手術に伴う出血，疼痛，感染などが少ないこと，2) 手術操作が簡便なこと，3) poor risk の症例にも適応でき，4) また創傷治癒が比較的早く得られるなど，種々の利点があげられる。

われわれは今回，扁平紅色苔癬，血管腫，乳頭腫，乳頭腫症の各々1例ならびに線維腫3例に対し，凍結療法を施行し，いずれも良好な結果を得ているので報告する。

凍結はいずれも無麻酔下で，それぞれの腫瘍に対し低温感受性や，ice ball の広がりなどを考慮し，1回60～90秒を圧抵法により1～2回施行した。

その結果，いずれも著明な疼痛，出血は認められなかった。ただし，扁平紅色苔癬の1例には頬部腫脹がみられたが，数日後には腫脹は消退した。その他には抗生剤などは投与しなかったが，感染例は1例も認められなかった。

術後約3週でいずれの症例も腫瘍は肉眼的に消失し，現在まで再発例は認められない。従って今回の凍結療法は，ほぼ満足すべき結果が得られたものと思われる。

今後はさらに臨床例に応じて，凍結時間，凍結温度，凍結速度ならびに融解速度，凍結回数などを検討し，さらに基礎的研究を実施して，より適切な凍結療法を確立していきたい。

#### 演題6：上顎癌に対する三者併用療法の検討

—とくに減量手術例について—

○伊藤 信明，平賀 三嗣，遠藤 隼人，  
工藤 啓吾，藤岡 幸雄，村井 竹雄，\*  
柳沢 融\*\*